

〈他者〉としての中国語

——堀田善衛『断層』の材源と方法——

陳 童君

一、中国語へのまなざし

敗戦翌年の一九四六年を中国の上海で過ごした堀田善衛は、その年の日記のなかに次のような興味深い内容を書き残している。⁽¹⁾

まはりに聞えるものは、つねに騒々しく耳障りな中国語ばかりである。何か心を苛立てる上海語ばかりである（一九四六年四月三〇日付）。

敗戦直後に日本人留用員として中国政府に就職した堀田は、この時、すでに上海で半年間以上の残留生活を送ってきた。そのあいだに、彼は職場や日常生活のなかで絶えず中国人と対話していたのだが、一方で、異言語の中国語に囲まれた彼が、しばしば強烈な違和感に襲われていたこと

が、前掲の日記の記述からも窺える。たしかに慶応仏文出身の堀田善衛が中国語になじんでいなかったのはさほど驚くにはあたらず、彼にとって中国語はあくまでも見知らぬ外国語であり、いわば異質な〈他者〉にほかならなかった。しかしこうした中国語への〈他者〉意識が彼の帰国後の文筆活動に濃厚な影を落としている以上、それもまた堀田の戦後文学の内実を知る上で、一つの視点となるはずである。たとえば処女作『祖国喪失』の第二章にあたる『共犯者』（個性、一九四九年五・六月合併号）のなかで、作者は中国語に注がれた主人公の〈他者〉意識のまなざしを次のように描いている。

家庭料理風の宴が半ばに達した頃、進行役をつとめていた王効中が濁音の多いあたりの上海語とはうってか

わった美しい北京語で杉に祝辞を述べると求めた。一座はしんとした。倪の祖母がきつい眼で杉を注視している。その静けさの底には、かたく結ばれた同志感情にも似た動かぬものがたしかに存在し、また火をつければ忽ち燃え上るに違いない敵意、に似たものもたしかに揺曳していた。ただのおめでとうではすまないものがある。何語で喋るか。どことなく祝宴以上の真剣さがちりちりほり見えるこの雰囲気にこたえるには……日本語以外にない、それが王効中にどういう風に通訳されるかは別として、杉の気持が収まらない。

ある中国語雑誌社で働いている日本人主人公の杉は、中国人の同僚に誘われて彼らの宴会に参加する。その席で、杉は進行係から祝辞を求められ、周りの異国人の目に晒されることになる。こうした中国人らの集団的視線のなかに、杉は「忽ち燃え上るに違いない敵意」が「揺曳していた」のを体感し、自分が「何語で喋るか」という選択を迫られることになる。やがて「この雰囲気にこたえるには」「日本語以外にない」と判断した彼は、結局中国語の使用を意識的に避け、日本語で発言することを選ぶのである。

このように、周囲の中国人に対する日本人主人公の対抗意識は、中国語／日本語という言語上の対立関係に投影さ

れ、異国の中国に対する主人公の〈他者〉意識も、異言語の中国語への拒絶感に表出されている。実際に、処女作『祖国喪失』をはじめとする堀田初期の一連の「上海もの」において、小説の主人公は例外なく中国側の文化機関で働く日本の知識人として設定されているにもかかわらず、主人公自身の中国語の使用は、作者の操作によって可能な限り回避されていた。このために、戦後の堀田善衛は中国での外地体験を様々な方法で自作の文学世界に収斂させたものの、その中国体験の核心となつたはずの中国語は、あくまでも〈不在〉の形で取り扱われることになっているのである。

この点を考えると、堀田善衛が一九五二年に中国語の〈不在〉をテーマにして短編小説『断層』を発表したことは、彼の戦後の文学的人生において、一つの転換点をなしているといえよう。雑誌「改造」一九五二年二月号に掲載されたこの作品は、敗戦前後の上海に二年近く滞在した主人公の安野が、中国語を学ぼうとしながらも徐々にその機を失っていく経緯が描かれている。それまで〈他者〉としての中国語を自作の言説空間から意識的に排除していた堀田善衛は、『断層』の執筆に至り、ようやく中国語の〈不在〉を真正面から問うことになったのである。一方で、『断層』以

降、堀田は『歴史』（新潮社、一九五三年）や『時間』（新潮社、一九五五年）などの中国を題材にした小説を書き続けたが、これらの作品では中国語はすでに物語の表面に現れており、主人公の言表手段の一つとして位置づけられる結果になっている。その意味でも（他者）としての中国語は、『断層』の成立によって、はじめて堀田善衛の文学世界に市民権を獲得したと考えることができるし、『断層』が堀田の戦後文学を解読するために不可欠な作品である理由もその点にあると思われるのである。

ところで、堀田の初期作品のほとんどがそうであるように、『断層』を対象とした本格的な研究論文は存在しておらず、作品の材源や創作の方法などに対する基礎的考察も、現在まで放置されたままになっている。本稿は、『断層』の基礎研究もかねて、戦後文学における「中国語」の表象形式について一考察を試みるものである。そのために、まず作品の生成過程や素材が取り入れられていく様態を各種の資料で把握し、そのうえで、堀田善衛『断層』における「中国語」の位相を確認したい。

二、草稿「断層」の問題性

『断層』が初出の際に短編小説の形で発表されたのは前

にも紹介した通りである。一方で、この作品が、作者が構想を練る段階において、まず実名形式のエッセイとして書かれていたことはあまり知られていない。この事実は現在「神奈川県近代文学館」所蔵の『断層』の草稿で確認できるが、未発表の資料であることから、まずその内容を紹介し、そのうえで作品『断層』の生成過程を確認しておきたい。

『断層』の草稿は、B4判四百字詰めの新潮社製用紙十枚を用いてペン字で書かれたものである。原稿の第一枚目に「断層」というタイトルが書かれているが、このタイトルの左側に、「中国にゐた頃―武田泰淳氏への感謝」という原題の抹消跡も見られる。この改題の原因は判然としないうが、手掛かりの一つは、草稿の内容そのものに求められるように思われる。

たとえば「私が中国にゐた時間は、決して長くない」という言葉で始まる草稿において、堀田自身を思わせる語り手の「私」は、まず敗戦前後の上海で「中国文学の大家」である武田泰淳との付き合いの経緯を回想していく。「私」は戦時下に「国際文化振興会の調査部なるところに職をもつてゐた」が、「敗戦の年の三月に上海に着陸し」、その後、「しばらく武田泰淳氏と一緒に暮し」ていた。このとき、「私」

は「泰淳さんに正式に弟子入りして」中国語を学び、それと同時に、武田から彼独自の「日本及び日本人の運命史論、文学論」を教わっていた。しかし一方で、「私」の眼に映る武田は「どこことなく血腥いものの匂う人」であり、彼が日常で話す中国文学も「まことに血腥いもののやうに私には思はれた」。そのために、中国にいた頃の「私」は武田と交わりながらも、必ずしも彼のことを理解していたとはいえない。一方、「私」の中国語も最後までものにはならず、「いまだに私は小説一つ読めない」と語り手は告白する。そして草稿の最後に、語り手は次のような言葉をもってテキストを結んでいる。

日本の現状を中国の文学者がどう考へてゐるかは、全く知るに由ない訳であるけれども、恐らく彼我の断層は、或る部面では非常に近接しながらも、他の部面では、断層は恐らく巨大なものになつてゐ、またなりつつあるやうに思はれる。特に私たちの側の断層の外辺には、種々様々なコンプレックスが渦巻いてゐる筈である。この断層とは、外の世界との対比に於てこそ断層であるけれども、私たちにとつては、これはそつくりそのまま現実なのである。その断層に身を置くこと。この一文は『断層』の初出稿には見られないが、草稿で

「断層」という言葉が現れるのはこの結末の部分のみである。この点から考えると、当初「中国にゐた頃―武田泰淳氏への感謝」と題して回想文を書こうとした堀田が、かつての中国体験を追体験する中で次第に新しい課題を発見し、最後にそれを「断層」というキーワードに凝縮させたことが想像される。すなわち「中国にゐた頃」から「断層」への改題は、草稿の執筆過程における作者の問題意識の変容に由来するものと推測できるのである。ところが一方で、前記の草稿の結末で、堀田は日中文学者の間に「断層は恐らく巨大なものになつてゐ、またなりつつある」と指摘しながらも、その「断層」の内実を明示することを、「日本の現状を中国の文学者がどう考へてゐるかは、全く知るに由ない」という理由で意図的に回避している。そのかわりに堀田は、日本の文学者にとつて「断層」が「そのまま現実なのである」といい、「その断層に身を置くこと」という断片的な言葉を記したところで筆を絶つたのである。その結果、草稿のタイトルは最後に「断層」に定められたにもかかわらず、「断層」というテキストの主題そのものの意味は、依然として未確定のままになっているのである。

このようにテキストの主題の不安定さが草稿「断層」の未定稿としての性格に由来しているのはいふまでもない

が、それと同時に、草稿の執筆当時、作者の堀田自身が持っていた対中国コンプレックスもその背後に大きく作用しているように思われる。たとえば草稿のなかで、堀田は「現代日本乃至、日本からして世界をとらへるためには、視点は日本と西欧といふ二つだけでは、どうしてもとらへきれない」といい、近代日本の自画像を描くためには「中国といふ、もう一つの視点」が不可欠であると力説している。しかし他方で、彼は、「言葉が不自由であつたから、私が中国及び中国人に対して抱く感想なども、随分歪んだ鏡の反映による」ものだと自認し、「中国語も読めないで断言的なことを云ふ資格はない」と述べている。すなわち中国を不可避の〈他者〉として認識した堀田は、一方で自分の中国体験における中国語の〈不在〉をも常に意識せざるを得ず、そうした問題意識は堀田の対中国コンプレックスを構成することになり、中国表現者としての資格を自ら否定したうえで、彼に武田泰淳のような中国語の使用者との差異を強く自覚させることになったのだ。そして草稿の執筆において、そのような差異への自覚が中国を語ろうとする堀田の志向を持続的に相対化し、彼と中国との隔たりを次第にあらわにした結果、当初、「中国にゐた頃―武田泰淳氏への感謝」と題して書き始められた草稿のテキストには、中

国語の〈不在〉という新しいテーマが不可避のものとして取り込まれ、このテーマをどのように取り扱うかということが必然的に作者の課題になっていったのである。この点でいうと、堀田が草稿のタイトルの最後に「断層」に改題した事実は、中国語の〈不在〉の課題に取り組もうとした彼の意思表示として考えることができる。また、草稿の段階で『断層』のテキストをエッセイの文体で書き上げた堀田が、後にそれを小説の形で再構成しなければならなかった理由もやはり同じ点に求められると思われるのである。

三、中国体験の再生産のなかで

後に「改造」に発表された初出の『断層』は、草稿に記された堀田の上海生活への回想をもとに三人称の小説として再構成されたものである。作品は次のように始まっている。

安野ははじめから中国語の勉強はあまり熱心でなかった。というのも、彼にとって中国へゆくゆききたいという希望は、中国を舞台にして、あわよくばヨーロッパまでもいつてみたいという、欲ばった気持とうらはらになっていたのであった。もちろん、昭和十九年と云えば、中国へゆくこともそろそろむずかしくなり

出し、ましてそこからヨーロッパへゆくなどということとは、どう考えても出来ることではなかったが、不可能であろうと何であろうと、当時恐らく人々は、各々何等かの意味で実現不可能な夢に導かれて生きていた筈である。

戦争の末期に「中国を踏台にして、あわよくばヨーロッパまでもいってみたい」という主人公安野の内面心理を報告した物語の語り手は、一方で、その考え方の不合理さを「昭和十九年と云えば、中国へゆくこともそろそろむずかしくなり出し、ましてそこからヨーロッパへゆくなどということは、どう考えても出来ることではなかった」と指摘する。さらに語り手は「不可能であろうと何であろうと、当時恐らく人々は、各々何等かの意味で実現不可能な夢に導かれて生きていた筈である」といい、主人公の認識を讀者に分析してみせる。こうして語り手は、過去の中国体験の世界に生きる主人公と視点を共有しながらも、しばしば物語行為の現在に戻り、事後的な視点からその体験の意味を批評している。換言すれば、初出『断層』の語り手は、主人公安野の中国体験の「報告者」を務めると同時に、その体験への「批評者」の役割をも担うことになっているのである。

こうした語り手の二重性を持った役割は、エッセイから小説への改稿もたらした作品の言表主体の位相の変化を示す一方、改稿の行為そのものに内在する作者の問題意識の所在をも覗わせるものである。実名形式のエッセイで書かれた草稿『断層』の場合、叙述者の役割を自ら担う作者は、「語る」行為の主体であると同時にその対象にもなっていた。小説への改稿において、そのような作者の位相は、主人公の視点に同居する語り手と、主人公に対して批評的態度を持つもう一人の語り手とに分化する。主人公の視点を共有した語り手は彼の中国体験を忠実に追跡するが、その反面、批評者としての語り手は、その体験の意味を讀者のために解析しつつも、しばしばその問題点を摘発し、主人公の認識の欠落を追究する。そして、こうした語り手の二重の位相を媒介に、作者は、己れの実体験を物語世界に織り込みながら、同時にその体験の再生産をも可能にしていくのである。

たとえば作中では、主人公の安野が「四六年の初夏」に上海のある「日本問題座談会」に参加した経緯が描かれている。語り手によると、この座談会は現地の「ある新聞社の主催」によるものであり、主題が「多分に政治的要素を含んだ広汎なものであった」という。その席上で、「白沫如」

という発言者は、戦時中における「日本文学界の諸大家の動きや党派のあり方」を詳細に述べ、それを「中国の漢奸文学者とともに並べて」激しく弾劾する。そして、こうした白沫如の攻撃に安野は「首筋に寒いものを感じるほど」の衝撃を受け、その様子を恐怖を覚える。しかも「次から次へと出席者は烈しい発言をつづけ」たために、次第に座談会にいたたまれなくなった安野が、やがて会場から逃げ出したのだとされている。

このように、元々対話の場として機能したはずの日中間の座談会は、実際には正反対の役割を果たし、中国文学者への拒絶感を主人公の内面に喚起する結果となった。一方で、同じ拒絶感に関連して、上海時代の堀田善衛の日記には次のような記述も見られる。

「改造日報」での文化人座談会のと、田漢が郭沫若に向つて、沫若はあるところで日本の教育は普及してゐると云つたが、自分はさうは思はぬ、と云つたところ、沫若は、いやあれは単なる外交辞令にすぎぬ、とはつきり云つたといふ。それで林さんは全く憤慨してゐたが、ぼく自身同感であつた。文学者としてのまことがない、全くまことがない。己れの神に対する誠実さ、さういふものが、どの文学者にもなささうだ。い

やなことである。／ぼくは恐らく如何なる文人にも会はずに帰るであらうが、それはそれでよいと思ふ（一九四六年七月二六日付、傍点は原文）。

「改造日報」の座談会で自分の対日発言を「外交辞令」とした郭沫若の姿に堀田は嫌悪感を覚え、「文学者としてのまことがない」と批判する。ところで、こうした郭沫若への個人的な否定は、そのまま中国文学者に対するトータルな否定に発展し、「己れの神に対する誠実さ」が「どの文学者にもなささうだ」という結論が導かれる。この結論は、中国の文学者を「ニセモノ」の文学者として否定したことによって、反語的に「ホンモノ」の日本文学者の正統性を確認し、日中国文学者における本質的な差異を規定することになる。そして、こうした差異への規定をもって中国の文学者を異質な（他者）として位置づけた堀田は、その（他者）と対話することの困難を自身に納得させながら、最後に「ぼくは如何なる文人にも会はずに帰るであらう」という判断にたどりつくのである。

このように、上海時代の堀田が、中国の文学者に対して過剰な（他者）意識を持っていたことが彼の日記の記述からもはつきり見て取れる。ところで、日記の言及する実在の「改造日報」の座談会については、現在上海図書館所

蔵の「改造日報」一九四六年六月一四日の紙面に、「日本を語る座談会 中国各界名流が参集 本社主催」という記事も見られる。その内容によると、「改造日報」の座談会は「中国の正しい対日政策の確立」を目的として同年六月一三日に開かれたものであり、出席者は「郭沫若氏を初め、何れも中国著名の日本研究家」であった。その席上で、「本社総経理より最近の日本情勢につき簡単な報告」がまず発表され、「次いで政治、経済、文化、社会其他日本のファシズム打倒問題、日本天皇制問題等に関し真剣な討論が行はれた」という。この座談会を作品の素材として『断層』に取り入れる際に、堀田が郭沫若の対日批判の発言に焦点を絞ったことが容易に察せられるが、この操作によって日中文学者の対立をクローズアップした作者は、一方で、その対立から生まれてくる主人公の認識の変容をも作品に描いていくのである。

「日本問題座談会」で中国文学者からの批判に直撃された安野は、「彼らのあの怒りに対しては、如何なる理由も理由になら」ず、「ましてや話せばわかったり、磨滅したりはしない」と判断し、日中文学者における相互認識の差異を痛感する。ところがそれと同時に、彼はまた、「世代が更新しない限り、或は日本に革命的な変化が来ない限りは、中

国文化を担う人々との溝通は不可能だ」という論理を展開し、中国を異質な〈他者〉として位置づけながらも、その〈他者〉との対話に障害が生ずる原因を日本自体の後進性に帰着させる。そしてこうした日本の後進性のなかには、日本人である安野自身の後進性も必然的に包括されるので、やがて彼が座談会に参加したことも「代表的文学者の顔を、要するに見物にいったにすぎない」と自己否定することになる。これと並行して、安野の対中認識そのものは「詳細確実な知識に支えられていないのであるから、底はさして深くない筈である」と語り手に批判され、主人公における認識変革の必要性が浮き彫りにされてくるのである。

このように語り手を媒介に、堀田善衛は中国文学者に対する彼自身の過剰な〈他者〉意識を安野という虚構の分身に投影させながら、そうした認識の変革を作品世界に求めようとしている。すなわち小説の主人公に仮託して過去の「自己」と対話しつつあった作者は、その「自己」の認識の欠落をも傳統的に検出し、それによって彼は自分自身の中国体験の再生産を物語の展開と共に実現していくのである。その意味でエッセイから小説に改稿された『断層』というテクストは、物語の形を身にまといながらも、実質的

には作者自身の対自的会話として機能しているともいえる。一方で、『断層』を執筆する際に中国語の〈不在〉という課題を抱えていた堀田善衛が、武田泰淳のような中国文学研究者との差異を常に自覚していたことは、本稿の第二節にすでに紹介した通りである。そのために、中国体験の再生産を求めようとしている堀田には、その体験における武田泰淳の位相を再確認することも要請されることになる、元々対自的会話として機能していた『断層』のテクストは、やがて対他的会話の性格をも合わせ持つことになるのである。

四、中国文学研究者の異質性

上海時代の武田泰淳に関連して、堀田の当時の日記には次のような興味深い一節が見られる。

「改造日報」は、もう三日も文化欄がない、段々面白くなくなつて来る。／会田さんのところでの会では、「希望について」といふ、僕の「改造日報」に三日にわたつた文章の道が、まことに危険な道だといふことをしきりに云はれた。ぼくはまた、あまりにも武田さんの「郭沫若のことも」といふ文章は安全すぎると云つた（一九四五年十月一六日）。

この短い一文を精読することによって、堀田の中国体験における武田泰淳の位相を垣間見ることが出来る。ここで堀田は「希望について」と「郭沫若のことも」という二つの文章に言及しているが、両者はいずれも敗戦直後の「改造日報」の文化欄に掲載されたものである。特に「郭沫若のことも」と題されたのは武田泰淳が同紙一九四五年十月五日の創刊号に発表した評論であり、内容は題名通り、郭沫若の人物評になっている。「私達が中国文学研究会を始めた頃、郭沫若は市川に住んでゐた」という交友関係への回想から始まったそのテクストには、中国文学の研究者として、日中文学者のつながりを訴えようとした武田の連帯意識が強く表れている。一方で「郭沫若のことも」が発表された翌日から、堀田も同じ「改造日報」に「希望について」を三日間にわたって発表している。この評論のなかで、堀田はまず祖国の敗戦後の運命に対する現地の日本居留民の冷淡ぶりを手厳しく批判し、「目先が真暗であつてこそはじめて希望といふものは存在し得るのだ」と強調している。その次に、彼は日本民族の滅亡を覚悟することの必要性と、その再生の希望を中国に求めることの重要性を説き、最後に「永遠なる日本もまた各々の死滅すべき人生にしか存在せぬ」と結論付けるのである。

このように、中国側の視点をできる限り共有しようとした武田の「郭沫若のことも」に対して、「希望について」の場合、堀田はあくまでも敗戦国民の視座から中国との相互関係を捉え、日本人本位の立場を貫いた。そして「希望について」が友人から「まことに危険な道だといふことをしきりに云はれた」際に、堀田は、「あまりにも武田さんの『郭沫若のことも』といふ文章は安全すぎる」と反論する。この反論のなかで、堀田は「希望について」の「危険」を「郭沫若のことも」の「安全」に意図的に対置するのだが、そのような二項対立の構図をあえて強調したところに、武田への差異化を手段に、自らの対中認識の特質を求めようとする彼の志向も看取される。すなわち上海時代の堀田は、武田泰淳のことを自己確認の媒介と捉えており、武田との相違点を確認してはじめて、彼自身の対中認識の独自性が確立されるのである。当初「中国にゐた頃―武田泰淳氏への感謝」と題して『断層』の草稿を執筆した堀田が、武田の介在をもつて彼自身の中国体験を語らなければならなかった理由もそこにあるわけであり、こうした武田泰淳の位相は草稿の小説への改稿と共に物語の世界にも移行し、初出『断層』においては、大島健吉という小説の副主人公に継承される結果にもなっている。

初出稿に登場する大島は安野と同居している日本の知識人であり、戦時下の上海で「中国現代文学を専門に研究している」のだという。それに対して、戦争末期に日本から上海に渡った安野は、「中国語がちゃんと出来ないことを恥しく思い」、大島に「正式に弟子入りして」中国語の指導を受けている。この中国語の勉強を機に、安野は大島の精神世界に立ち入ることを許されるのだが、勉強中の雑談のなかで安野がしばしば「内地の被爆状況」や「飢餓の悲しさ」に言及したのに対して、大島は「米軍が上陸して来て国内戦が開始されたら」「同胞相殺戮し合う内戦が起」ることを予言し、その惨状を「指先をびりびり顫わせながら低声で語る」だけなのだった。こうした大島の話から、安野は「全く異質な、内臓の中へ冷く重いものをさしこまれるような、底深い恐怖」を覚え、これを機に、中国文学研究者の大島もまた不可解な「他者」として彼の眼に映ることになってしまう。その結果、安野の中国語の学習はうまくはこばなくなり、やがて彼自身も「大島に習うことをあきらめてしまった」のである。

まもなく日本の敗戦が来る。それまで租界に生活していた安野と大島は「虹口」という日本人集中地区に移され、「部屋割当の都合上、別れて住むことにな」る。これで戦前

から続いてきた二人の同居生活も終了することになるのだが、それをきっかけに二人の中国体験も次第に異なる方向に進み、やがて次のような対照的な様相を呈するようになるのである。

安野は戦争中とは反対に、次第に無口になっていった。

これに反して、大島は日がたつにつれて雄弁になっていった。彼は戦争中に入らなかった抗戦文学の諸作品が、大凡自由に読めるようになり、精神的にも充実したものが感じられるようになったせいであろう、と思っていた。しかし戦争中の新文学に関する限りでは、中国と西欧とを入れかえれば、安野も努めて新しいものを読んでいたのであるから、事情は同じ筈なのだが、何故かしら安野は次第に無口になっていったのである。

敗戦後、大島が中国語の文学作品を耽読していたのに対し、安野は西洋書籍の専門店に通い、英仏の文学書をつとめて読んでいた。しかし中国語の書物との付き合いのなかで大島が「日がたつにつれて雄弁になっていった」のに反して、安野は「戦争中とは反対に、次第に無口になっていった」。こうして中国語を手段に表現力を獲得しつつあった大島の精神的充実は、中国語の〈不在〉を原因に言葉を

失っていった安野の喪失感に対比され、二人の中国体験の差異があらわにされる。この差異を解消しようとした安野はまもなく中国語の勉強を再開するが、一方で、戦後に中国の「抗戦文学の諸作品」を耽読していた大島は、奇しくも中国側の文学者との直接的対面を一貫して拒否し、一途に中国語のテキストのなかに自らを封じ込めている。そのかわりに、大島は安野を訪ねて来る度に彼自身の戦後認識を語り、その核心の部分が「血だらけ論」として主人公の眼に映ることになる。ここにいう「血だらけ論」とは敗戦後の日本人の運命に対する大島の想像であり、戦争に負けた日本で、「兄弟も友達もなにも、どいつもこいつもがやあーと殺されて」、「血を頭からからだじゅうにいつぱいに浴びて走りまわる」姿を指している。この「血だらけ論」のなかに、安野は中国に対する大島の「加害者」意識を感じ知したが、しかしその正体は相変わず「はつきりとかみがない」とされる。こうして大島との付き合いのなかで、安野は絶えず彼の中国文学研究者としての異質性につつきかき、二人の差異は物語の進行と共に拡大するのである。そのため、大島の異質性を解説しようとする安野の要求も次第に強まり、やがてそれは、主人公と『在日本獄中』という中国語テキストとの出会いを、作中に呼び込むことに

なるのである。

五、『在日本獄中』を読むこと

本稿の第三節に紹介したように、敗戦後、安野はある新聞社が主催した「日本問題座談会」に参加し、その席上で日中文学者における相互認識の差異を確認することになった。その後、「大島があゝ座談会へ来ていなかったことが不思議に思われた」安野は、大島の真意を確めるために彼の家を訪ねていく。そこで、安野は大島のところへ「ねころんで積み上げられた本」をしばらく眺め、やがてそのまなざしが、「中に一冊、『在日本獄中』という薄い本」に注がれることになる。ここにいう『在日本獄中』とは大島が集めてきた中国語の書籍である。その題目に目を引かれた安野は、中国語が読めないにもかかわらず、「漢字だけ拾って」その内容を解説していく。安野の紹介によると、『在日本獄中』は謝秀英という中国人の女性作家の自叙伝であり、著者自身が「昭和九年日本にいた時、東京の某警察署に拘留されたこと」が回想されている。そのテクストに「中国文学を研究している若い日本人たち」も登場するのだが、中の一人の青年が「どう見ても大島その人なのである」という。青年は謝秀英の巻添えで彼女と同じ警察署に投獄され

るのだが、その不運に際して謝秀英は自分の責任を感じて心を痛める。やがて釈放されて帰国した謝秀英は、「悪虐無道な日本帝国主義は、かの優秀な青年を虐殺しはしなかつたか」と危惧し、青年の「その後の運命に思いをはせ」る形で『在日本獄中』を書き上げたのだと主人公は伝えているのである。

このように、語り手は主人公の「読み」を借りて、『在日本獄中』という中国語テクストを一個のメタ・テクストとして作中に挿入している。一方で、同じ『在日本獄中』について、『断層』の草稿には次のような記述も見られる。

謝氷瑩といふ、「女兵」などで我国にも知られてゐる女流作家の「在日本獄中」といふ本が戦後の上海で刊行された。これは謝女士が昭和九年日本にゐた時、目黒警察に拘留されたことがあり、その時のことを激烈な怒りを以て書いたものであつた。(略)変名を使つてはあるが、この謝氷瑩事件のまきぞへをくつて同じく逮捕された青年が、どう見ても武田泰淳なのである。

私¹は武田氏に聞いてみた。さうだ、と云ふ。

いわゆる「謝氷瑩事件」とは一九三五年四月一四日に発生した検挙事件であり、当時早稲田大学に留学していた中国人の女性作家謝氷瑩が、共産党の嫌疑で目黒区警察署に

召喚され、そのまま同署に三週間余り留置された事実を指している。⁽⁴⁾この時の入獄体験をもとに、謝冰瑩は戦時下に「自叙伝『在日本獄中』(耕耘出版社、一九四二年)を発表している。実在の『在日本獄中』は一人称の日記体のテクストであり、語り手の「私」が、山井という日本人の友人と付き合うところから始まっている。山井は「私」と語学の「交換学習」を行っている「中国文芸研究会」の一員であり、彼に中国語を教えている「私」は、日本語を習いに山井の家に通っている。ある日、山井の家から帰った「私」は、理由不明で特高に逮捕されるのだが、やがて刑務所に入れた「私」は、意外にもそこで山井の姿も発見することになる。

牢の扉を通っている多くの見知らぬ人々のなかに、私は山井の姿を認めた。最初は容貌の近い別人だと思っただが、その細い近視眼、ジャガイモのような禿頭、小さくかわいい口、ゆったりとした歩き方を見れば、もはや山井その本人に間違いがないとわかった。(略)私がかえって不安になった。山井は私より早く逮捕されたらしい。もしかしたら、先ほど彼の家で警察の話をしていて時、警察はすでに周りで待ち伏せをしているたかもしれない。私が彼の家を出た直後に、彼は警察

にとられたのではないか。だとしたら、彼が拘留されたのは、私の巻き添えではないか。⁽⁵⁾

ここに登場する「山井」が武田泰淳の変名であることは、戦後版『在日本獄中』(遠東図書公司、一九四八年)のなかで著者自身が明示した通りである。これについて、武田泰淳も「中国文学」一九四七年一月号に「謝冰瑩事件」を書いている。その内容によると、当時の謝冰瑩は日本語を習うために武田の自宅に通っていたが、彼女が逮捕されたのと同じ日に武田自身も同じ警察署に連行され、「二十五日の拘留のあと、更に二十日間とめ置かれた」のだという。ところで、「私はその事件以来、すこぶる用心ぶかくもなり、如何なる行為をなす場合にも、いちおう疑つてからとりかかるやうになつた」と武田が語っているように、「謝冰瑩事件」が彼にもたらしたのは中国文学者への不信感であり、「日本と中国の間に虹のやうな橋をかけ得るといふ美しい夢」の幻滅であった。それと対照的に、謝冰瑩の眼に映っていた武田は、「正義や人道の立場を固守するために日本の軍閥に監禁された」良心的な日本知識人であり、『在日本獄中』のテクストに表現されているのは、あくまで日本の友人に対する謝冰瑩の強烈な連帯感に他ならなかった。このように、同じ当事者であったにもかかわらず、「謝冰瑩事件」

に対する二人の認識は限りなく隔たっており、『在日本獄中』は、いわば日中文学者の相互認識の「断層」を照らし出すための格好の反照装置になっているのである。

作中で、メタレベルの『在日本獄中』を読み終わつた安野は、まもなく大島本人から謝女士との関係を教えられ、『在日本獄中』の主人公が大島をモデルとしていた事実を知らされる。その結果、すでに日常生活のなかで大島の「加害者」意識を看取していた安野は、日本帝国主義の「被害者」であるもう一個の「大島」を発見し、そのために、彼の眼に映っていた大島の「表象」は二重のものになる。一方でこうした二重の「表象」のなかに、安野は大島の自己認識のまなざしと、大島に注がれた中国文学者のまなざしとの絶対的差異を認め、日中文学者のあいだに「恐ろしい断層がある」と判断する。しかも「この断層は生きている」ものである以上、それが「ひとまたぎやふたまたぎで飛び越せない」ものであるという結論に主人公はたどりつくことになるのである。このように、「断層」という作品のキーワードの意味は、『在日本獄中』という中国語のメタ・テクストの生成と共に語りの表面に浮び上がり、大島の「表象」の二重化を媒介に、その内実が明らかにされていく。その結果、元々異質な（他者）として安野の前に現れていた中

国文学研究者の大島は、中国語の使用者であるにもかかわらず、認識の「断層」に囚われている点で、主人公と同質の課題を抱えることになる。ここにいたって、安野における中国語の（不在）の課題はもはや単なる語学の問題に回収できなくなる。たとえ大島と同様に中国語を習得したとしても、もはやそれは、日中文学者における相互認識の「断層」の解消を保証し得ないからである。そのために、安野は否応なく無解決のアポリアの前に立たされることになるのだが、一方で、この難問への対応策を提示するために、作者はもう一個のメタ・テクストをも作中に用意していたのである。

六、『旅愁』を語る堀田善衛『断層』の射程

『在日本獄中』という中国語テクストに出会った安野は、同時にもう一個の日本語のテクストをも読んでいる。

その頃彼は、日本のある作家がその中で西欧との対決を試みた非常に長い小説を読んでいた。そしてその中に描かれた対比が、たとえば神社にある御幣の形と、数学の集合論の対比といった形で行われ、西欧と日本は両者相殺して、読めば読むほどその対比が一種の真空地帯、乃至は絶対的な脆弱さ、しかもその脆弱さこ

そがいのちであるといったものを生んでゆくことに驚嘆した。

このメタ・テクストの題目は作中に明示されていないが、「西欧との対決」が「神社にある御幣の形と、数学の集合論の対比といった形で行われ」ていると紹介されたその小説が、戦時下に一世を風靡した横光利一の『旅愁』を指していることは、恐らく当時の読者の多くに察知されていただろう。これに関連して、『断層』の草稿にも「横光利一氏の『旅愁』が東洋と西洋を考へるに際して、たとへば幣帛と数学の集合論の対比といふ甚だしいことになつたのは、氏の資質の宿命もあつたらう」という記述が見られ、『断層』を構想する際の堀田が、『旅愁』を作品の材源の一つとして取り扱っていたことが確認できる。問題は、『旅愁』をメタ・テクストとして『断層』に取り入れるを試みた堀田が、自分の作品の射程をどこに延ばそうとしたのか、である。

周知のように、『旅愁』は日中戦争が勃発した一九三七年から連載が始まり、敗戦直後に作者の死によって中絶された未完の長編である。この作品は横光独自の東西文明比較論を展開したものととして戦中に数多くの読者を獲得したが、戦後になると、世論の大転換のなかで逆に批判的標的

にされていく。たとえば荒正人は『旅愁』を「西欧合理精神の罵倒、東洋の非合理主義を基軸したものだ」といい、『特攻隊』の飛び立った文学的基地のひとつがこの一作であつた^⑥と批判するのである。ほかに杉浦明平も『旅愁』を「虚妄と侵略賛美の書^⑦」として断罪し、さらに臼井吉見は「衰弱した時代の衰弱したわれわれの精神そのままの象徴である^⑧」と否定している。このように、『旅愁』はファシズム時代の残滓と看做され、戦後の批評家から手厳しい攻撃を受けていた。しかし一方で、これら『旅愁』批判者の多くは評価の基準を専ら「西洋との対決」の可否に求めていた点で、共通の限界もあらわしている。すなわち日本／西洋の二項対立の構図が『旅愁』という作品それ自体を統御しているように、それと同じような二元論的な思考法は『旅愁』の批判者たちにも共有されており、いわば戦後という時代のパラダイムを構成することになっていたわけである。そのため、敗戦後の『旅愁』批判は攻撃の激しさに比して成果は乏しく、やがて被占領時代の末期になると『旅愁』は再びベストセラー^⑨として文壇的市民権を取り戻し、「東洋と西洋といふ、日本の智識人にとつて何ひとつ解決されてもゐず、途方にくれるやうな、云はゞ宿命的課題に真向から取組んでゐる」^⑩野心作として再評価されることにもなる

のである。

この点から考えると、『断層』で中国語の〈不在〉の問題を追究しつつあった作者の堀田が、一方で主人公の視点に仮託して『旅愁』論を展開しているという事実は、あたかも同時代のパラダイムの盲点を衝いているようにも見受けられる。「日本のある作家がその中で西欧との対決を試みた非常に長い小説」を読んでいるという安野は、その小説のなかに日本と西欧との「相殺」を見だし、「一種の真空地帯」を発見する。この〈空白〉の存在は彼に「絶対的な脆弱さ」を感じさせるのだが、しかし同時に、その脆弱さこそが「いのちであるといったものを生んでゆく」という判断も彼は持つっており、「日本のある作家」との共通点をも自覚している。一方で、中国語の〈不在〉という彼自身の〈空白〉に対して、主人公は、「中国に事実いながらなお世界を西欧と日本という風に考えがちである」と「己れ自身の精神的混乱」を認め、その混乱の実体は「劉青年という鏡にはつきりと写っている」とされている。ここにいる劉青年とは安野の隣家に生活している若い中国文化人である。彼は西欧文学愛好者の安野に英語学習の指導を依頼するのだが、それを交換条件に、安野は劉青年に師事し、「中国語の勉強をはじめからやり直すことにし」ていたのだっ

た。この交換学習において「劉青年の英語はどしどし進歩したが、安野はいつまでたつても四声の発音さえろくに出来なかった」とされているように、語り手は二人のあいだに語学の成功者と失敗者の対立の構図を浮き立たせ、それによって劉青年と安野との差異をあらわにしている。こうした対比のなかで、やがて安野自身も「劉青年が THIS IS A MAN とつうのと、自分が THIS IS A MAN とつうのとでは、まるで内容が違うのではないか」と判断し、日中文化人における認識の「断層」の存在をあらためて確認するのである。ところがある日、劉青年が突然に行方不明になったことを原因に、「いままでの例になく長続きした」安野の中国語の学習も中絶を余儀なくされる。その後、安野は「中国語勉強も、これでだめになってしまった」と断念し、彼の中国語学習の体験も終止符が打たれることになるのである。これに並行して『断層』の物語も閉じられることになるのだが、作品の最後で、語り手は主人公のまなざしを追いつながら、彼の心情を次のように報告している。

彼は買いだめた洋書類の上にちよこんとのつかった中国語教科書を眺め、また長いあいだぼんやり壁の世界地図を眺めていた。中国語はとうとうものにならなかつたが、日本とヨーロッパしか念頭になかつた彼の世

界地図は完全に変貌していた。(傍点は原文)

この結末と、作品の冒頭との呼応関係に着目するならば、『旅愁』を語る堀田善衛『断層』の射程も浮き彫りにされてくるに違いない。物語のはじめに、「中国を踏み台にして、あわよくばヨーロッパまでもいつてみ」ようにした主人公は、物語の現在にいたると、「日本とヨーロッパしか念頭になかった彼の世界地図」に新たな空間を探り出している。この空間の発見は、「中国語教科書を眺め、また長いあいだぼんやり壁の世界地図を眺めていた」主人公の最後のまなざしにその内実が表出し、中国語の〈不在〉を参照装置として、主人公の精神的地図における〈中国〉の座標を照らし出そうとする語り手の志向が表れてくるのである。この志向の背後からは、中国語の〈不在〉を厳然たる事実として認めながらも、その〈不在〉を逆手にとって新しい視点を獲得しようとした作者自身の問題意識が窺われるわけで、すなわち『断層』の創作において中国語の〈不在〉を持続的に追究してきた堀田善衛は、最後にそうした言葉の〈不在〉を視点の〈不在〉として再認識し、それによって、日本／西洋の二元的構図に回収されない第三の視点としての〈中国〉を現前させたのである。

おそらくこうした〈中国〉の取り扱い方に、堀田善衛の、

中国研究者の武田泰淳との徹底的な差異を窺うこともできよう。武田泰淳は、〈中国〉の内面化を自身の文学的出発点として規定してただけに、彼の文学表現のなかには、〈中国〉の他者性を捨象し、中国側の立場に同調しようとした志向がしばしば見られるのであった。⁽¹⁾一方で、〈中国〉のことをあくまでも一個の〈他者〉として認識している堀田善衛の場合、〈中国〉の位相は、〈西洋〉というもう一個の〈他者〉との対比を通してはじめて確認されるものであり、〈中国〉そのものが自明の存在ではないし、ましてや自足の存在とはなおさら認められていないのである。この点でいうと、堀田善衛『断層』の生成過程には、戦後日本におけるパラダイム・シフトの力学も投影されていると考えられる。『断層』が発表された一九五二年に、戦後初めての中国語ラジオ講座がNHKの主催で行われたことは、おそらくあまり知られていない。その背景には、「世界におけるアジアの比重が大きくなりつつある今日」、「若い人の語学の勉強はヨーロッパ語の勉強と並んで、アジア語の学習もぜひ望ましい」という風潮があったと指摘される。すなわち革命中国の誕生をはじめとする新生アジアの胎動は、当時の日本の知識人に、新しい視点によるヨーロッパとアジアとの比較を要請し、中国語学習の意欲を促していたわけ

ある。この意味において一九五二年に発表された堀田善衛の『断層』は、いわば〈他者〉としての中国語に向き合うとした同時代者の集団的意識の個人的表現に他ならなかった。そしてこの表現をもって〈他者〉としての中国語に真正面から立ち向かった堀田は、その後、どのような形で〈他者〉としての中国を表現しようとしたのか、また時代の鼓動に絶えず耳を傾けていたこの作家は、次の作品にどういうような時代意識を文学の表現に収斂させたのか、これらの問いを堀田善衛の戦後文学の全体像の解明につなげることを今後の課題とし、本稿を閉じたい。

※『断層』の本文は『堀田善衛全集卷一』（筑摩書房、一九九三年）に拠った。

【注】

(1) 本稿における上海日記の引用は原則として原資料（神奈川県近代文学館所蔵）を用い、必要に応じて紅野謙介編『堀田善衛上海日記 滬上天下 一九四五』（集英社、二〇〇八年）を参照した。

(2) 『堀田善衛全集卷一』（筑摩書房、一九九三年）、一〇一―一〇二頁。

(3) 原題は「郭沫若のことなど」となっているが、ここでは便宜のために堀田の日記の表記に従う。

(4) 「突如、赤、嫌疑で謝冰瑩女史召喚」（読売新聞、一九三五年四月二三日）。

(5) 前掲『在日本獄中』二七―二八頁、原文中国語、論者訳。

(6) 荒正人「文藝時評」（潮流、一九四六年六月）。

(7) 杉浦明平「横光利一論―『旅愁』をめぐる」（『文学』、一九四七年一月）。

(8) 臼井吉見「展望」（『展望』、一九四八年二月）。

(9) 杉森久英「旅愁―ベストセラー紹介と批評」（『中央公論』、一九五一年三月）。

(10) 亀井勝一郎「旅愁」の矢代耕一郎（『群像』、一九五一年八月）。

(11) この点については、拙稿「戦後文学における「対日協力者」の表象」（『國語と國文學』、二〇一五年一月）を参照されたい。

(12) 引用文は「ZINラジオテキスト中国語入門講座」一九五六年四・五月合併号の序文に掲載された主催者の回想に拠った。同資料は東京大学東洋文化研究所で閲覧した。

【付記】本稿を執筆するにあたって、未発表資料の使用について堀田百合子氏（堀田善衛の長女）に格別のご配慮を賜った。この場を借りて謝意を表したい。

